



かの忌わしき砦 / That
Hideous Strength
(Thulcandra) (1945)
/ C・S・ルイス (西村
徹・中村妙子訳) / 奇想天
外社 (1/10刊・¥1,700)

神学SF三部作といわれる『沈黙の惑星を離れて』『金星への旅』『かの忌わしき砦』(本書)が、ようやく完訳された。

実のところ、この三部作の評価は、SF界で、それほど高くはなかつた。以前、このチエック・リストでも触れられていたと思うが、要するに、ルイス流の宗教色が災いしたようなのだ。

さて、本書は、火星(マラカンドラ)、金星(ペレランドラ)に続く、地球(サルカンドラ)の物語である。人間の総合的な科学管理をめざす(ナチスを思わせる)NICEと、ついに天上の力により、彼らを滅ぼすランサムとの対決——前二作が、別世界の光景を鮮に描き出した、いわゆる幻想小説として勝れたものであつたのに對し、現実の問題に近い、妙に生々しい作品である。

本書は、第二次大戦の終わった年に出版された。そして、大戦は、科学の持つ残虐性を明らかにした。NICEは、その象徴である。だが、NICEを葬りさる、ルイスの筆からは、何か違和感を感じてしまうのだ。結局、現代社会のわれわれは、神の宗教より、惡魔の科学に近いのかもしれない。(俊)